

富良野市

学籍番号 6336 林七夕乃



1 地名の由来

富良野という地名の語源には諸説があり、アイヌ語の「フラヌ」「フーラヌイ」「フラヌイ」から転訛したものといわれている。「フラヌ」とは“赤色の溶岩や焼石が沢山あるところ”の意で、十勝岳附近の状況を称したもの、また「フーラヌイ」は“硫黄臭き火炎の土地”「フラヌイ」は“硫黄臭い悪水の溜まっている土地”と言われており、いずれも十勝岳の噴気と臭気に由来している。

富良野市はまた、『へそのまち』とも呼ばれている。それは、かつて地球の重力と経緯度の調査を行う際、富良野小学校の校庭に測定のための機械を置くためのコンクリートの台座を設置したことが関係しており、その台座が、いつしか「北海道中心標」と呼ばれるようになり、石碑が建てられ、“へそのまち”という名前で呼ばれるようになったのである。

2 歴史

富良野市は、1956年に東山村と合併した。当時は、「新市町村建設促進法」の施行により、全国的に合併が促進されていた。この法律は、町村を合併させ、新たに市をつくることで、地方自治体に力をつけさせようという目的でつくられたもので、市制施行の条件は、人口3万人以上であった。しかし東山村と合併した時点での人口は約2万人8千人、山部村に合併を呼びかけたものの、「山部村は合併しなくても財政的に十分やっていける」との考えで合意にいたらなかった。そんな合併交渉は10年もの間続いた。山部村は、その間に山部町となり、ついには合併の賛成・反対を問う住民投票が行われた。その結果わずかの差で合併賛成者が上回り、1966年2月に議会でようやく合併を決定したのだ。そして、幾多の紆余曲折を経て、同年5月1日、道内で29番目の都市、富良野市が誕生したのである。

そんな富良野市は現在、ラベンダーやドラマ『北の国から』に関する様々な観光スポットが人気を集め、北海道を代表する観光都市として大変知名度が高く、毎年全国各地から観光客が訪れる市へと成長した。

そのほかにも富良野市は、全国屈指のごみの資源化率を誇る市としても有名で、市民が一体となった取り組みは大変高い評価を受けているのである。

3 地理

図 1 富良野市の位置



出典：富良野市公式 HP

3.1 地形

富良野市は、上川支庁管内の南部に位置し、北緯 $43^{\circ}09'24'' \sim 43^{\circ}24'05''$ 、東経 $142^{\circ}16'17'' \sim 142^{\circ}40'40''$ 、東西 32.8km、南北 27.3km、で北海道のほぼ中央にあり富良野盆地の中心都市である。

総面積は、600.83k 平方メートル、東方に大雪山系十勝岳、西方に夕張山系芦別岳がそびえ、南方には千古の謎を秘めた天然林の大樹海があり、市域の約 7 割が山林という恵まれた自然条件にある。市域の西方は、この二つの山並みに囲まれて南北に伸びたほぼ長円形の盆地が形成され、その中央部を十勝岳の東南部に源を発する石狩川支流の空知川が、富良野川などその支流を集めながら南から西北方に貫流している。

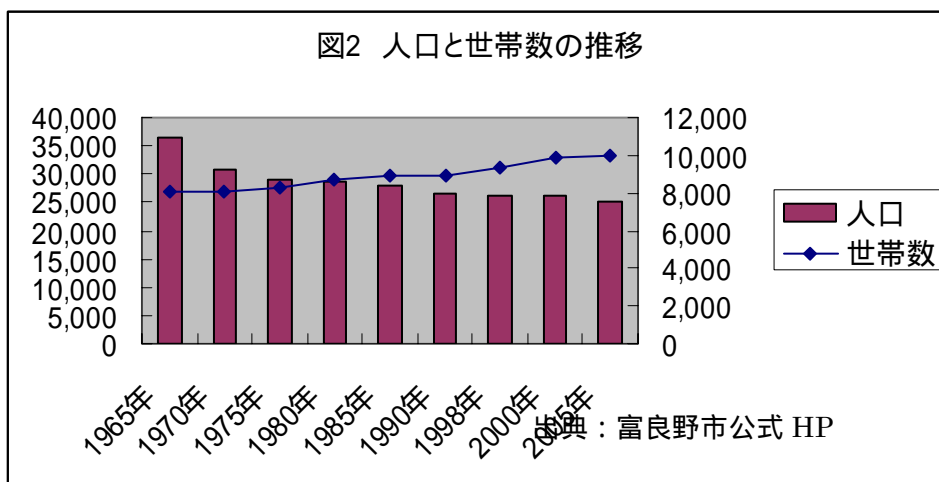
3.2 気候

気候は、北海道の内陸部で大雪山系と夕張山系に囲まれた地形のため、典型的な大陸性気候を示し、気温の日較差や年較差が大きく、夏季には集中豪雨の傾向もみられ、降雪期間は 11 月中旬か 4 月上旬までで、積雪深は 1 m 内外だが、山間部では 2 ~ 3 m に達する。1999 年の年平均気温は、6.8 で、最高気温 34.1、最低気温マイナス 25.5、年間日照時間 1,418 時間、年間降水量 1,192mm となっている。

3.3 人口及び世帯数

図 2 からわかるように、国勢調査によると人口は、1965 年をピークに減少している。これは官公庁の統廃合、企業の撤退、離農などによるものであり、人口は 1990 年には 26、

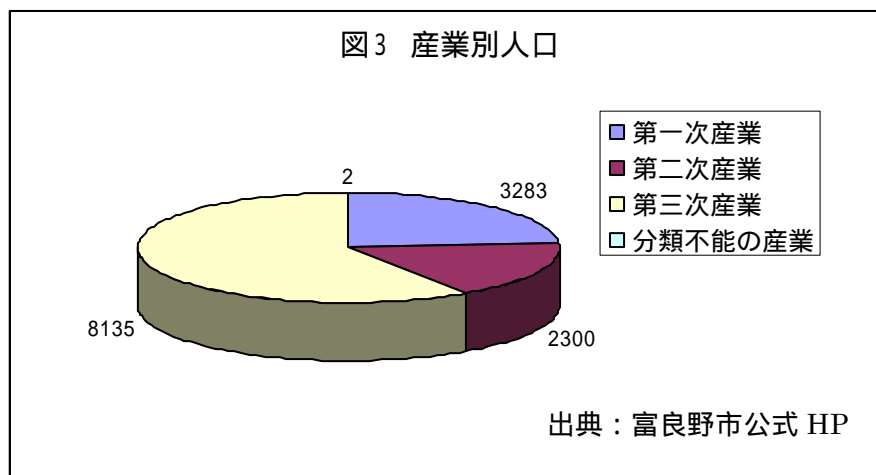
665人、2000年には26,112人にまでと減少。しかし近年は安定傾向にあるようだ。



一方世帯数は年々増加傾向にある。それはなぜだろうか。おそらく、核家族化によるものである。都市家族の基本的な特徴であるといわれる核家族化はわが国においても増加傾向にある。核家族化の進行により高齢者だけの世帯や高齢者の1人暮らし世帯が増えているのだ。

4 産業

4.1 富良野市の産業



富良野地域の基幹産業は農業である。しかし農業を取り巻く環境の変化、担い手の高齢化などにより第一次産業就業者数は減少が著しくなっている。観光関連を中心として第三次産業就業者の割合が増加している。一部の地域では、はクリーン農業宣言をし、減農薬、有機栽培、生産者と消費者の間のルートの改善などに積極的で農業政策に手厚い町となっている。産業別就業構成を大まかにみても、第1次産業は大きく減少、第2次産業は

さほどの変化はみられず、第3次産業は増加傾向にある。

産業別人口 13,720 人に対し、第1次産業人口は 3,283 人(23.9%)、第2次産業人は 2,300 人(16.8%)、第3次産業人口は 8,135 人(59.3%)、また、分類不能の産業 2 人(0.0%) 就業者数は年々減少している。

4.2 富良野市の農業

富良野市の農業は、水稻の生産調整対策を契機に、稲作、畑作経営に野菜が導入され、複合経営が急速に進展しているといえる。農業産出額のうち、たまねぎ・にんじんを中心とする野菜が全体の 69%を占め、水稻が 5%、畑作が 14%、畜産が 12%である。

富良野市においては、収益性の高い富良野農業の確立、多様でゆとりある農業経営の促進、富良野農業担い手の育成と確保、環境と調和した富良野農業の促進並びに豊かさと活力ある富良野農村の構築を 5 本の柱として施策を組み立てているのである。現在、重点的に取り組んでいる施策は、土づくりの推進、産業研修センターを活用した担い手の育成、法人の育成、家族経営協定の推進、廃プラスチック類の適正処理、産業クラスターの形成などである。

4.3 農家戸数

富良野市の農家戸数は減少傾向にある。2004 年は 898 戸で農家人口は減少傾向が続いているが、60 歳以上の占める割合は増加傾向にあり、農業構造の改善に取り組むことが極めて重要となっている。(参照：富良野市農林課調べ)

4.4 農業組合生産額

農業産出額は 1998 年をピークに、輸入農畜産物の増加や B S E の発生にともなう野菜全体の消費低迷などの影響から、年々減少傾向にある。2003 年は農業産出額が約 180.3 億円となった。しかし上川管内の 14.2%を占め、全道でも 8 番目に位置している。その内訳は、玉葱、にんじん、スイカ、メロンを中心とした野菜が 67.3%を占めており、その他水稻が 4.9%である。

4.5 生産農業所得

生産農業所得は 1993 年をピークに減少傾向である。農家一戸当たりの生産農業所得は全国平均の約 6.18 倍で、また、10a 当たり生産農業所得は、全道平均の約 1.97 倍である。農業専従者一人当たり生産農業所得は、全国平均の約 2.0 倍であり、北海道平均の 92.0%となっている。

4.6 終わりに

以上より、富良野市は大変農業が盛んな市といえるが、富良野農業に先が見えないと今

30代、40代の若い農業者が次々と農業に見切りをつけて離農しているのが現状である。農業の良さをもう一度考え直して原点に戻って組み立て直す事が必要となっているのである。

しかし、現在そんな状況に対応しようと、収益性の高い富良野農業の確立と、多様でゆとりある農業経営の促進、富良野農業担い手の育成と確保、環境と調和した富良野農業の促進、並びに豊かさと活力ある富良野農村の構築を5本の柱として施策を組み立てている。中でも重点的に取り組んでいる施策は、土づくりの推進、産業研修センターを活用した担い手の育成、法人の育成、家族経営協定の推進、廃プラスチック類の適正処理、産業クラスターの形成などさまざまなものがあげられ、今後富良野市の農業がどのように改善されていくか、注目である。

5 観光

富良野市は、一面のラベンダー畑はもちろん、TVドラマや映画の舞台になった数々のスポットも外せない見どころである。冬はワールドカップも開催された極上の雪質でスキー・スノボが楽しめる人気観光地でもある。チーズやワインも有名ですが、農産物やメロンもおいしく、地元の食材を使った宿泊施設や飲食店が多いのも魅力である。またアウトドア・インドアの体験メニューも豊富なのが特徴で、多くの観光客が訪れる北海道を代表する観光地である。

北の国から資料館

人気ドラマ北の国からの貴重な資料を、歴史を感じさせる大きな倉庫を改装して展示してある。思い出のシーンがよみがえり、「北の国から」ファンを楽しませてくれる場所である。

麓郷の森

1981年当時の「北の国から」ロケで使われた丸太小屋を中心に、森の写真館や彩の大地館が、森の喫茶室などが森の中に点在。最も歴史ある「北の国から」のスポットである。

五郎の石の家

拾ってきた家—やがて町



(写真：富良野市観光協会 HP)

ドラマ「北の国から」「'89 帰郷」の中で黒板五郎が建てた石の家で、富良野岳の過去の火山活動のため畑から大量に出る石を使ったエコロジカルな家である。少し離れた場所からではあるが、ドラマのあのままの風景が楽しめるスポットとして非常に人気を集めているのだ。右隣の写真はドラマ北の国から 2002 遺言の中で、黒板五郎が廃材を集めて作った家

で、大量廃棄社会への警鐘が含まれており、その不思議な風貌が人気を集めている。

また、2004年12月に「純と結の家」も新しく OPEN!! 五郎のアイデアが訪れる人々を楽しませてくれるのだ。

ふらのワイン工場



北海道でも数少ない地元原料、醸造、販売という一貫体制のふらのワイン。ぶどうヶ丘の中腹に立つレンガ造りの工場は、周りの風景と調和している。1982年には、世界ワインコンクール、モンド・セクションで金賞を受賞しており、工場見学と試飲を目当てにたくさんのお客が足を運ぶ人気スポットである。

ふらのワインハウスラベンダー園



富良野市の代表的なラベンダースポット。富良野駅から最も近いラベンダースポットで、レンタサイクルでも訪れることもできるので観光客の人は知っておくと良い。ワインハウスやワイン工場に隣接している。富良野盆地や十勝連峰とラベンダーのコントラストが大変素晴らしく、観る者を魅了してくれる場所である。

山部自然公園 太陽の里



周法芦別岳(1726.5m)を間近に望み、キャンプ場やパークゴルフ場、テニスコートなどが整備されている。園内の「ふれあいの家」には食堂や研修室、展示ホールがあり、芦別岳への登山口も隣接している。また「遊々の森」事業により自然散策路コースが2コースあ

り観光客を楽しませてくれる。

5.1 富良野市の観光業の現状

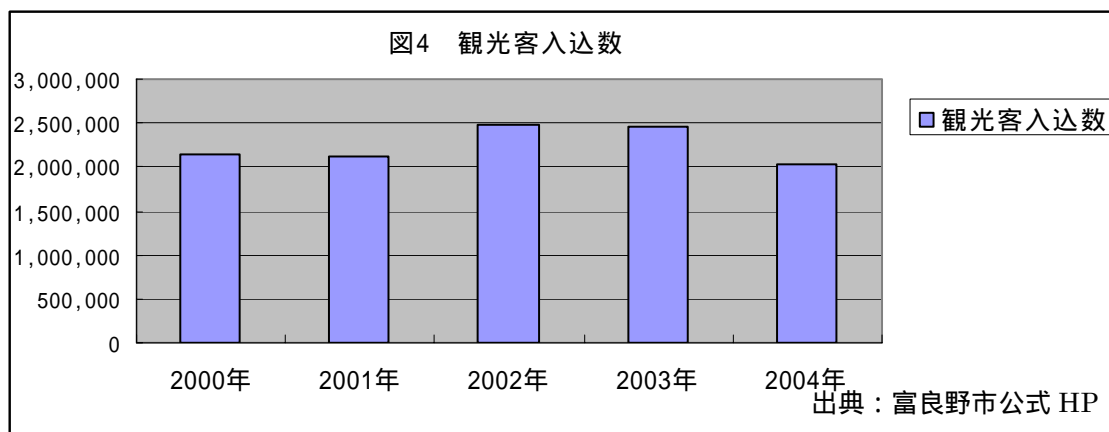


図 3 からわかるように近年富良野市への観光客入込数は 2002 年をピークに減少傾向にあるといえる。このままでは観光と農業を基幹産業としている富良野市はどうなってしまうのか。

現在テレビドラマ北の国のロケ地めぐり、あるいはラベンダー観光そして冬のスキーを目的として毎年約 200 万人もの観光客がこの地を訪れるが、このままただ単に現状を維持するだけで、やがてブームが去ると同時に富良野市自体の観光衰退に直結するのは、もはや必至といえる。そんな中、地元では数年前から富良野らしい「真の観光は何か」という問いかけが観光関係者中心にされてきたのである。

そこで富良野観光協会は 2000 年より観光クラスターをキーワードとして富良野らしい真の観光を探ることが目的で発足したプロジェクトである。入り込人数といった量的側面に着目するのではなく、自然環境・農産物・滞在メニュー・交通・宿泊・食・特産品などといった地域の特色を PR することで、地域全体の観光活性化を図る。そして観光従事者だけではなく市民農業産者商店やサービス業・行政職員など異業を横断した人材の確保。これらの 2 点がそのプロジェクトの発足理由である。

このプロジェクトにより、富良野市は 1 歩進んで地域まるごとを博物館と見立て既存自然や文化を見直し、住んでいる人々の生活環境を大切にしたい街づくりの概念「エコミュージアム」を富良野流に取り入れることとなったのである。こうして立ち上げられた研究部会「富良野エコミュージアム形成事業」は、行政・消費者・観光事業者や生産者が一体となって地域の暮らしや人物・歴史等といった生活文化と観光の関連性をテーマに、「地域の魅力の再発掘と構築」により、将来の観光振興開発を行っているのである。

近年地域を取り巻く情勢は、経済や雇用の不安などにより国民生活や企業のマインドが冷え込み、さまざまな需要が減少するという厳しい情勢にある。しかし今後このような

厳しい経済の影響を受けつつも富良野市の観光がより発展していくことを願い、様々な事業が展開されているのだ。

富良野市公式 HP : <http://www.city.furano.hokkaido.jp/>

ふらの観光協会 HP : <http://www.furano.ne.jp/kankou/>